

## 移動を希求する心理\*

——『ライフスタイル移民』についての社会心理学的考察——<sup>1)</sup>

前 村 奈 央 佳\*\*

加 藤 潤 三\*\*\*

藤 原 武 弘\*\*\*\*

### 問題

太古の昔から、人々は移動を繰り返してきた。それは、家族の生活の向上のため、民族が経験する困難から逃れるため、商売のため、技術を学ぶため、勉強のため、あるいは結婚のためであった。心理学における移動や移住に関する研究は、それほど歴史が古くはない。その多くは、北米や豪州などの多民族国家と呼ばれる地域において、移民が経験するカルチャー・ショック、アイデンティティ、適応のプロセス、ホスト社会との関係性などが検討されている。民族大移動などの歴史はさておき、現代社会で移動する人（文化移動者）のタイプについて Ward, Bochner, & Furnham (2001) は、旅行者、留学生、ビジネスマン、移民、難民を挙げている。また、移民と難民の違いについて Ward et. al. は、難民が新しい環境に強制的に「押し出されて」いるのに対し、移民は個人、家族、社会的、経済的、政治的目的を追い求めて新しい国へと「引っ張られて」いると述べている。移民を引きつける最も強い“pull”要因は、経済的な機会であるとされる。ときには家族が分断されたり、政治的な圧力がかけたりする

場合もあるが、移民を決断する上で、経済的な要因はそれらの要因に勝る強い影響力を持つとされる (Winter-Ebmer, 1994)。戦前戦後に南米やハワイへ移住した日系移民も、このパターンに当てはまる。また、日本人は長期的に国際移動をすることは少ないが、高度経済成長期における地方から都市への労働力移動は、まさに経済的な要因によるものであった。すなわち、国内での移動も含めた移民・移住の現象は、人々が就労の機会や経済的な資源を求めて、新しい国や地域、文化に移動することを主に意味してきた。

ところが近年、上のような従来のパターンとは全く異なる移住がみられるようになった。新しい土地の経済的な要因ではなく、その土地そのものの、その土地での生活環境が“pull”要因となって移住が行われるケースである。この種の移住者は「ライフスタイル移民」、移住のスタイルは「ライフスタイル移住」と呼ばれ、社会学、人類学、観光学などの領域で注目を集めている。吉原 (2008) によると、ライフスタイル移民とは、旅と移住の間を往還する人々であり、もう1つの人生を求め、自ら選び取った新天地に関わろうと移住する人々である。少し古くからは、「リタイアメント（退職）移住」と呼ばれる現象がライフス

\*ライフスタイル移民、I ターン、移住動機

\*\*神戸市外国語大学外国語学部講師

\*\*\*琉球大学法文学部准教授

\*\*\*\*関西学院大学社会学部教授

- 1) 本研究は、文部科学省科学研究費補助金（研究活動スタート支援：コミュニティにおける地元出身者と移住者の交流に関する異文化間心理学的アプローチ（課題番号 24830115・研究代表者－前村奈央佳）、および若手研究 B：移住者と地元民のソーシャルキャピタルを醸成するコミュニティ要因の検討（課題番号 24730511・研究代表者－加藤潤三））の助成を受けた。面接調査にご協力頂いた皆様に感謝申し上げます。

タイル移住に類する。リタイアメント移住は、ヨーロッパ北部（イギリスやドイツなど）の富裕国出身者が、引退後にスペインやイタリアの沿岸地域、あるいはフランスのドルドーニュやイタリアのトスカーナ地方のような魅力的な田舎へ移住することを指す（King, Black, Collyer, Fielding, & Skeldon, 2010）。彼らによると、米国内でも、寒い北部地域からフロリダやカリフォルニアのような「陽光の州」に向かって、リタイアメント移住がなされるという。

リタイアメント移住をするのは比較的高齢の富裕層の人々が中心であるのに対し、日本では、ライフスタイル移民に若い世代が多いという特徴がある。日本人のライフスタイル移住は、1990年代初頭のバブル経済崩壊後、香港やシンガポールなどのアジア諸国で職を求める日本人女性が発端のようである。彼女らの多くは20歳代後半で、それまでの海外経験を通じて培った海外志向や英語力、日本で感じる精神的圧力から海外就職を決意する傾向にあるという（中澤・由井・神谷, 2012）。Thang, Maclachlan, & Goda（2006）は、シンガポールで働く日本人女性のエスノグラフィに「自分の空間」という概念枠を導入し、従来の日本の家庭や企業組織での生活では得られない、彼女らが求める「望ましいライフスタイル」について議論している。女性に限らず、日本人のオーストラリアやニュージーランドへのライフスタイル移住についてはいくつか事例研究が存在する。たとえば長友（2007）は、オーストラリアに移住した日本人への聞き取り調査から、「日本の会社生活からの脱却」が移住の要因として最も多く言及されることを示した。また、Johnston & Kawai（2011）は、ニュージーランドに移住した日本人への調査から、移住の理由について①日本に居づらいという push 要因、ニュージーランドに引かれるという pull 要因の相互作用によることが多いこと、②過去に一時的な海外渡航経験を有する人が多いこと、③もともと漠然と海外に引かれる思いがあり、海外経験を通してニュージーランドを目指す特定の要因に変わっていくこと、

などのパターンを挙げた。こういった新しいライフスタイルの価値観の背景には、労働観や余暇観の変化があるという。それは、仕事と余暇のバランスや、私的領域（プライベート）を重視する価値観であり、20歳代や30歳代の若い世代で顕著である（長友, 2007）。

日本国内でのライフスタイル移住も増加傾向にある。都市部から出身地にかかわらない非都市部への移住を表す「Iターン」という用語も一般化している。「Iターン」という用語を打ち出したとされる長野県では、「長野県で新しい暮らしを見つけてみませんか?」といったキャッチコピーのもと、「Iターン相談室」が設置されており、移住者獲得への取り組みが盛んである（長野県HPより）。Iターンの事例研究は、ここ数年で少しずつ増えてきている。たとえば山崎（2013）は、小笠原諸島に魅了され、観光客から移住者となったIターン者の生活形態の形成と、「3年の壁<sup>2)</sup>」を越えて島社会に受容される過程を報告した。また須藤（2010, 2012）は、北海道や沖縄に移住した人々についての事例研究を行い、「よそ者」概念を用いて議論している。その他、京都府の山林地域への移住者が、地域での社会活動を実践していく過程を分析したものもある（松田, 2014）。

このように、ライフスタイル移民の研究は萌芽的な段階ではあるものの、徐々に蓄積されつつある。しかし、新しい生活を求める移住が明らかに自発的で、個人的な動機づけによって引き起こされた行動であるにもかかわらず、心理学的な知見に基づいた研究はほとんどなされていない。特に国内移住は、国際移住に比べて移動時間や距離が短いこと、言語の障壁が少ないこと、移動にかかる費用が安いことなど、国際的な移住に比べて物理的なコストが低い。そのため、経済状態などの外的要因より、個人の内面的な要因が移住という行動を引き起こすと考えられる。また、ライフスタイル移民が従来の移民と異なる特徴を有することは明らかであろうが、その他の移住スタイルと比較した上での概念的な位置づけがはっきりしてい

2) 一般的に、移住者は移住してから3年で、人間関係、社会環境、就労や生活上の困難から、移住地に住み続けられるか否かの分岐点に立たされると言われる。

ない。

そこで本研究の第一の目的は、国内移住における移住動機の類型化を試みることである。また、その類型における、ライフスタイル移住の位置づけを考察する。Furnham & Bochner (1980) は、国際移住の型を「海外留学」「海外勤務」「同伴」「海外旅行」などに分類している。この類型は移住動機を概念的・形式的に示したもので、個々のケースの質的な差異については言及していない。本研究では Furnham & Bochner の類型を一部参考にしながら、移住の実例の具体的な内容を踏まえて移住動機をパターン化する。第二の目的は、ライフスタイル移住に至る心理的プロセスについて、移住前後の感情状態の変化を中心に考察を加えることである。さらにそこから、移住動機の背景となる要因についても解釈を試みる。いわば、移住者が「なぜ移住する（した）のか」について、社会心理学的な視点から検討する。

上記の目的を遂行するにあたり、本研究では日本国内から、沖縄県へ移住する人々に着目した。沖縄では、1990 年代後半から 2000 年代前半のいわゆる「沖縄ブーム」以降、県外からの移住者が増加している。現在でも、都道府県別の地域魅力度は 3 位、居住意欲度は 5 位というデータもある（ブランド総合研究所, 2014）。移住者の実数としては、他都道府県からの転入者数はこの 20 年間、およそ 2 万 5 千人ほどいるとされる（総務省統計局, 2014）。この数字には U ターンや一時的な転勤者なども含まれているため、正確に毎年移住者がどれほどいるのかはわかっていない（加藤・前村, 2014）。だが、それを差し引いても、沖縄が移住先として魅力的であり、多くの人々が沖縄に移り住んでいることがわかる。特筆すべきは、日本全体の人口が減少傾向にある現在、沖縄は唯一、2035 年までの将来推計人口が増加傾向を示している（国立社会保障・人口問題研究所, 2012）。この将来推計人口は、生残率と純移動率をもとに推定されるものであるが、後者の純移動率は転入超過数（＝転入－転出）をもとに算出されるものであり、いかに沖縄の社会増が多いかを物語っている。事実、沖縄の転入超過数は、1996

年からの 18 年間のうち、13 年はプラス（転入者の方が多い）であった。沖縄への移住者のデモグラフィックな背景については、高齢者ではなく 20 代～30 代（特に 30 代夫婦）の移住が多いこと、近年は女性の割合が増加傾向にあること、関東東海の都市部や北海道からの移住が多いことなどが、過去に実施された調査からわかっている（井本, 2009）。

「沖縄ブーム」が世間を賑わせていた頃、沖縄は「パスポートのいらないアジア」とも表現された（太田, 2000）。このように、沖縄は国内の一県でありながら、国際移住と類するイメージが持たれている。また、日本最南端という地理的環境やその気候風土から、北から陽光の地を求めて南へ移住するリタイアメント移住と共通する側面もある。したがって、沖縄はライフスタイル移住の研究フィールドとして、国内で最適な場所の一つだと思われる。

## 方法

### 調査協力者

本研究では、日本の他都道府県から沖縄県へ移住した人（かつ、沖縄県出身ではない人）を対象とした<sup>3)</sup>。調査は 3 名の調査員（うち 2 名は訓練を受けた大学院生）がスノーボール・サンプリング形式で調査協力者を募り、21 歳～66 歳の成人 26 名（男性 20 名／女性 6 名：平均年齢 33.46 歳、 $SD = 10.87$ ）から調査の承諾を得た。沖縄での居住年数は 5 ヶ月～15 年（平均 = 6.08 年（ $SD = 3.85$ ））であった。

調査協力者の詳細な属性を Table 1 に示す。職業分布については、自営業が 2 名、会社員が 13 名、公務員（臨時を含む）が 3 名、学生・大学院生が 3 名、専門職が 1 名、無職が 2 名、アルバイトと主婦がそれぞれ 1 名ずつであった。出身地（エリア）については、北海道が 5 名、関東が 5 名、中部が 3 名、関西が 7 名、中国・四国が 2 名、九州が 4 名であった。居住形態については単身者が 14 名であり、その他は家族など同居であった。また沖縄に親戚がいるかについては、

3) ライフスタイル移住の位置づけについても検討するため、「生活の変化を求めた移住者」には限定しなかった。

Table 1 調査協力者のデモグラフィック要因

調査協力者	性別	年齢	職業	出身 (エリア)	居住形態	居住地	移住前の 訪沖回数	在沖年数 (年)
A	男性	30代	自営業	九州	単身	宜野湾市	0	7.5
B	男性	40代	会社員	北海道	4人	宜野湾市	1	14
C	男性	50代	学生・大学院生	北海道	2人	那覇市	10	2.9
D	男性	20代	会社員	関東	単身	沖縄市	2	4
E	男性	30代	会社員	関西	4人	南風原町	0	15
F	男性	50代	公務員	中部	2人	沖縄市	6~7	3
G	男性	20代	公務員	中部	単身	那覇市	2~3	5
H	男性	20代	会社員	関東	4人	南風原町	不明	12
I	男性	20代	会社員	関東	単身	那覇市	3	8
J	男性	30代	無職	中部	2人	うるま市	2	10
K	男性	20代	会社員	九州	単身	宜野湾市	1	6
L	男性	20代	アルバイト	九州	単身	宜野湾市	15	3
M	男性	20代	専門職	関西	単身	西原町	1	6
N	男性	20代	学生・大学院生	中国・四国	単身	西原町	1	3
O	女性	20代	会社員	関西	単身	那覇市	10	0.3
P	男性	20代	学生・大学院生	北海道	単身	宜野湾市	1	7.5
Q	女性	30代	自営業	北海道	3人	うるま市	1	8
R	男性	20代	会社員	関東	3人	読谷村	1	3
S	男性	20代	会社員	九州	単身	中城村	1	6
T	女性	30代	主婦	関西	6人	那覇市	2	7
U	女性	30代	会社員	関西	単身	うるま市	0	11
V	男性	20代	会社員	関西	4人	北谷町	20	0.5
W	女性	40代	公務員	北海道	4人	うるま市	2	6
X	男性	60代	無職	関西	5人	うるま市	14~15	1.5
Y	女性	30代	会社員	関東	単身	沖縄市	1	6
Z	男性	30代	会社員	中国・四国	単身	沖縄市	0	2

「あり」（配偶者、配偶者の家族など）が6名であった。居住地に関しては、北はうるま市から南は南風原町までの本島中南部であり、多くが都市部に居住していた。

## 調査方法

半構造化形式で、面接調査を実施した。基本的には調査員・調査協力者が1対1の状態で行ったが、一部、状況に応じて1対2の集団面接（1ケース）となる場合、調査協力者の知り合いが同席（同席者は調査協力者に含まない：2ケース）する場合があった。面接に要した時間は平均で約63分であった。

## 調査項目

面接では以下の項目について尋ねた。

### ①デモグラフィック要因

調査の初めに、上記の表に示した属性要因について尋ねた。

### ②移住についての質問項目

移住したきっかけ・動機について尋ねた。また沖縄に移住する前に、沖縄に対して持っていたイメージなどについても尋ねた。

### ③移住前後の心理的变化

移住前後の心理的・状況的な変化をとらえるため、調査協力者の生活史（ライフ・ヒストリー）について、移住した時から現在までを中心に、自由に語ってもらった。具体的には、次のような流れで聞き取りを実施した。まず、調査協力者が移住（来沖）する直前から、現在まで、移住後の沖縄での生活の中で生じた感情の変化を曲線（感情曲線：柴田，1993）で描いてもらった。その際、記入例（Figure 1）を見せながら、「0」をニュートラルな感情状態とし、上部に行くほど「良い・楽しい・幸福」といったポジティブな感情状態、下部に行くほど「悪い・つらい・不幸」といったネガティブな感情状態を示すことを教示した。併せて、感情曲線が上昇・下降した際の出来事や理由、またそれらが生じた時期（年）について記載

してもらった。感情曲線が描き終えられた後、それをもとに、感情の変化や出来事の内容について詳細に口頭で尋ねた。また、現在の感情状態として、沖縄に適応できていると思うかについても尋ねた（いつ頃、なぜそう思うようになったのかも併せて尋ねた）。

なお調査に先立ち、本研究の主旨やプライバシーの保護について十分説明するとともに、調査協力の同意を得た上で同意書にサインをもらい、調査を実施した。

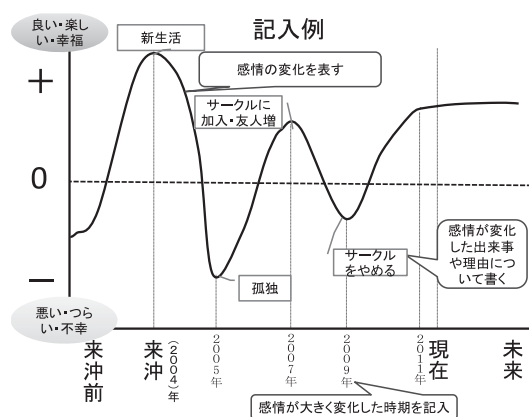


Figure 1 感情曲線の記入例

## 結果と考察

### 移住前の沖縄イメージ

移住地としての沖縄の魅力、言い換えれば沖縄移住への pull 要因を探るため、沖縄イメージについて尋ねた。Table 2 に、「移住前、沖縄に対してどのようなイメージを持っていましたか」という質問への回答に現れた単語や表現をまとめた。ポジティブなものとして、「美しい海」「暖かい気候」「人が温かい」など、いわゆる南国イメージに相当するものが目立った。一方、ネガティブなイメージとしては、「米軍基地」「危ない場所」など、基地問題に関連する事項がみられた。

### 移住動機のパターン

「沖縄に移住したきっかけ・動機」について、インタビュー録音データの該当箇所をテキスト化したものを筆者が読み、KJ 法（川喜田，1967；伊藤・田中・能智，2005）の要領でグループ化を行った。その後、Furnham & Bochner（1980）の類型も参考にしながら、グループ名（ラベル）を付け、図解化を行った。図解化の作業は、インタビューを実施した調査員に確認をとりながら進め

Table 2 移住前の沖縄イメージ (N=26)

	環境について	人について	その他
ポジティブ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・青い、美しい海 (6)</li> <li>・楽しみながら生きられる (5)</li> <li>・気候が暖かい (3)</li> <li>・ハワイ・グアムなどの南国 (3)</li> <li>・いいところ、住みやすい (2)</li> <li>・景色がきれい</li> <li>・強い太陽</li> <li>・白い砂浜</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人が温かい、優しい (3)</li> <li>・のんびり、ゆったり (2)</li> <li>・幸せ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ちゅらさん (2)</li> <li>・負のイメージがない (2)</li> </ul>
中立的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さとうきび畑</li> <li>・田舎 (3)</li> <li>・外国のよう、日本ではない (2)</li> <li>・観光地 (2)</li> <li>・まったく違った環境</li> <li>・原風景</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・イメージは持っていなかった (2)</li> </ul>
ネガティブ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・米軍基地 (6)</li> <li>・戦争</li> <li>・危ない場所</li> <li>・治安がよくない</li> <li>・暑そう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・肥満</li> <li>・不条理を被る人たち</li> </ul>	

※カッコ内 ( ) は件数を示す。

た。

移住のきっかけ・動機として、「就職」「転勤」「起業（カフェ経営など）」「進学」は〈ビジネス・勉強型〉と考えられる（9件）。また、「沖縄出身の家族の希望」「家庭の都合」「結婚」などの6件を〈同伴型〉とした。次に、「離職し、のんびりしようと思った（30代男性）」「気分転換をしようと思った（20代男性）」「疲れていて、全部リセットしたかった（30代女性）」など、ネガティブな出来事をきっかけに、美しい海と温暖な気候を求めて沖縄を訪れ、その後定住したパターンが散見された（5件）。その他、「深く考えていなかった。好奇心（30代女性）」などの好奇心からの移住や（2件）、「（家族の）病気の療養目的で（60代男性）」といった療養のための移住（1件）がみられた。これらのケースは〈ライフスタイル変化型〉にまとめられた。

完成した図を Figure 2 に示す。縦軸は、Furnham & Bochner の類型を参考<sup>4)</sup>に、移住の自発性（移住が「自発的」-「非自発的」）を表している。Furnham & Bochner はこの次元と、滞在期間の長さの次元で移動者を類型化している。本研究では、移住の動機の質的な違いについてより詳細に

検討するため、移住の自発性の次元に加え、移住目的の具体性（「具体的」-「抽象的」）を横軸に表した。移住目的の具体性は、沖縄で行いたいことが明確に定まっている場合を「具体的」とし、そうでない場合を「抽象的」とした。たとえば〈ビジネス・勉強型〉は、移住が自発的かつ移住目的が具体的であると考えられる（意図しない転勤などの例外は除く）。また、〈同伴型〉は、移住が非自発的であり、移住目的が抽象的（家族に同行することが目的であり、敢えて「沖縄」を希望してはならず、具体的な計画があったわけではないため）であると考えられる。〈ライフスタイル変化型〉は、沖縄の地での生活を自ら選んでいるが、目的は沖縄に行くこと自体にあり、具体的にどのような生活するか、沖縄で何をやるかは移動前には考えていない。このことから、移住が自発的・移住目的が抽象的な象限に布置されると考えられる。

以上のことから、沖縄移住の動機は、〈ビジネス・勉強型〉、〈同伴型〉、〈ライフスタイル変化型〉の3パターンに大別されることが示された。Furnham & Bochner による国際移住の動機の類型と照らし合わせると、〈ビジネス・勉強型〉は「海外勤務者」「留学生」に該当し、〈同伴型〉は（海外勤務者などの）「同伴家族」に該当するパターンであると考えられる。〈ライフスタイル変化型〉は、移住動機を質的に分類した結果として現れた独特のパターンであり、国際移住の類型に該当するものは見られない。本研究の調査協力者は若い世代が中心であったため顕出されていないが、退職後に新しい土地での生活を求める「リタイアメント移住」も〈ライフスタイル変化型〉に含まれると予想される。

## 事例の検討

次に、個別事例を取り上げながら議論を進めたい。本研究は、ライフスタイル移民について中心に取り扱うため、Figure 2 のパターンから〈ライフスタイル変化型〉に該当する3名の移住前後の

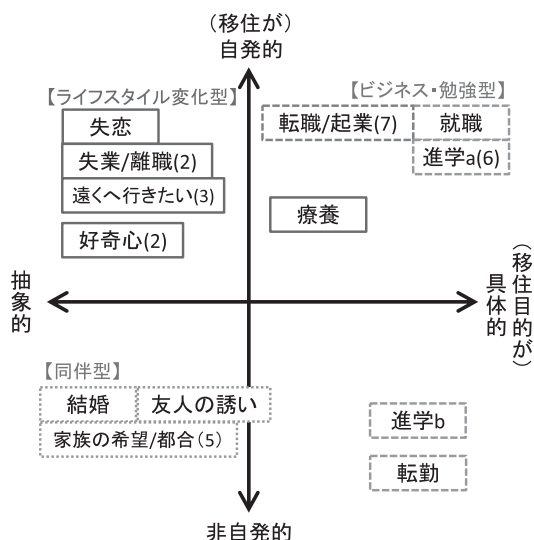


Figure 2 移住動機パターンの布置図<sup>5)</sup>

4) Furnham らの図では、縦軸が上下に「強制的／不本意な」～「自発的／満足した」とされているが、理解しやすさを考慮して、本研究の図では上方向を自発的、下方向を非自発的に置き換えた。

5) かっこ内（ ）は該当する移住者数を示す。なお、「進学」は、『沖縄の××について勉強するため』などの「進学 a：自発的」と、『行ける学校が他になかった』といった「進学 b：非自発的」で区別した。

生活史に焦点をあてる。そして、移住に至る心理的プロセスと、その背景となる要素について考察を行う。解釈にあたっては、インタビュー内容から特に「沖縄に来る前の出来事」「沖縄に来た(直接の)きっかけ」「来沖～現在まで(の出来事と感情の変化)」「現在の人間関係と定住意図」に着目した。以下では、インタビュー内容を時系列に沿って順序を入れ替えながらまとめ、感情曲線と照らし合わせて考察する<sup>6)</sup>。

### ◎事例 1-U 氏 (30 代女性／会社員／在沖年数 11 年／单身)

#### ■沖縄に来る前の出来事

(大学を)卒業してすぐ、専門職に就いた。仕事はいつも非常に忙しく、ずっと追われているような気持ちだった。もともとのおんびりしている性格だからか、忙しきことがとてもストレスになり、ストレスからか頭痛も慢性的になった<sup>7)</sup>。

『なんかもう全部リセットしたかった。知らない人のところ、自分のことを誰も知らないところに入って。ゼロからなのかイチからなのか分からないけど、最初からなかりリセットしたかった。』

#### ■沖縄に来たきっかけ

そんなとき、気分転換にハワイへ行き、「南の島」が好きになった。ちょうど当時、放映されていたテレビドラマ「ちゅらさん」の影響もあり、沖縄にも興味が沸いた。ハワイに移住したかったが、お金と仕事の問題もあり、だったら沖縄だと思った。沖縄に悪いイメージは全くなかった。思い立ったらすぐに行動、まずは職探しをした。ハローワークでは見つかりにくそうだったのので、沖縄の企業など、いろんな所に直接電話し、たまたま見つけた臨時職に応募、内定した。

『自分は、これがしたいというのが決まれば、もうそこに向かう人。沖縄で仕切り直しをしようと思った。』

#### ■来沖～現在まで

沖縄へは、大阪からフェリーに乗った。10 月の末、季節は秋だったが、南に行くにつれて、だんだん空気があたたかくなるのを感じた。その空気に、船の上でワクワクした。その後、数回の転職を繰り返して現在に至る。沖縄へは、来てすぐに適応できたと感じたし、今もうまく適応できていると感じる。その理由としては、

(子どもの頃から引っ越しが多かった)『行ったそれぞれの場所でいいように受け入れてもらってるので…(中略)…やっぱり自分のバックグラウンドが、同じとこで育ってきていないので、順応して順応して。なので、〇〇(他府県)にいるときはそこの言葉を喋っていたんですよ。今はちょっともう、初めて会った人が、沖縄の人じゃないの、っていうぐらい、もうイントネーションとかも沖縄になっているので…(中略)…やっぱり順応能力が高いんじゃないかな。自分の育ちとして、たぶん。転職しながら、行った先々の言葉でしゃべってきているので。わざとではなくて。』

#### ■現在の人間関係と定住意図

現在の人間関係の中心は、沖縄の人か、アメリカ人。ウチナーンチュ(沖縄人)には血筋がなければいけないと思うし、なりたいたいというわけではない。自分は『浮き草のような』状態だという。

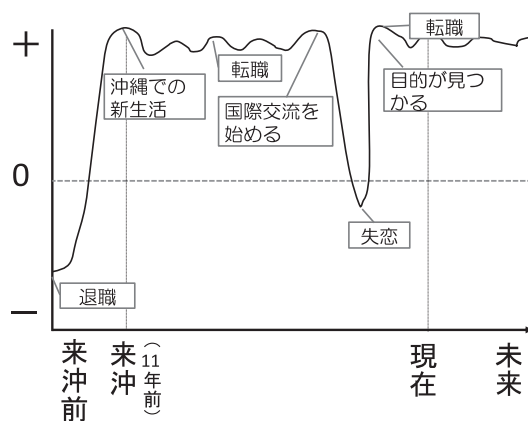


Figure 3 U 氏の感情曲線

6) 感情曲線は、実際には調査協力者自身の手によって描かれたが、個人が特定される恐れがあるため、細かい情報は削除し、曲線はおよその形状を模して筆者が作成した (Figure 3～Figure 5)。

7) インタビュー内容の記述は、著者が要約した。文中、二重かっこ (『 』) は調査協力者の実際の語りを表す。以下、この形式で記載。

だけど、他のところに行く機会がなければ、これからは沖縄に住み続けたいと思っている。

### 【事例1の考察】

U氏の沖縄移住の発端は、「仕事の多忙さによるストレス」というネガティブな事象からの逃避行動ととれる。感情曲線にあるように、来沖直後に感情が極端にポジティブになる傾向は、調査協力者全体にも一貫してみられた。これは、異文化間接触に特有の「ハネムーン期（Oberg, 1960）」だと考えられるが、U氏の場合はその後も全体的に幸福度が高い（Figure 3 参照）。本人の言う、『全部リセット』には成功したように見受けられ、沖縄の社会や人間関係へも適応的である。また、インタビュー中の会話に現れているように、『のんびりしている』『思い立ったらすぐに行動する』『順応能力が高い』『浮き草』など、自分自身を形容する言葉や、パーソナリティへの言及が多い。以上のことから、U氏のケースは、「移動することへの抵抗のなさ」「親しい人間関係を築きやすい性格」「行動力」などの「本人の資質」+「変化を求めるきっかけとなるネガティブな日常」が主な要因となり、ライフスタイル移住に至ったケースであると考えられる。

### ◎事例2-J氏（30代男性／無職／在沖年数10年／配偶者あり）

#### ■沖縄に来る前の出来事

20代半ばの頃、大きな失恋をした。今振り返っても、『人生最大のマイナス』だった。（感情がネガティブに）落ちるだけ落ちて、結局仕事も辞めてしまった。

『それまでは、人生はこれ（失恋した相手）で決まりだと思っていて、他のことは一切考えていなかった…（中略）…（離職のことは）なかなか決断できないですけどね、今思えば。』

#### ■沖縄に来たきっかけ

仕事も辞め、気分転換のつもりで、沖縄を旅行することにした。沖縄へは、過去に2回訪れていた。1度目は子どもの頃に父親の出張の付添で、2度目は学生時代に2週間くらいかけて自転車で本島を1周した。

『自分の足でまわって、そんときに人と触れあって。その行く先々、貧乏旅行だったんで、ゲストハウスとか多かったんですよ。もし、機会があれば自分も沖縄のゲストハウスで働きたいなっていうのはなんとなくあったので。だったら、いい機会だから夢を叶えようかなっていう。』

#### ■来沖～現在まで

始めは、移住までは考えていなかった。短期間のつもりでゲストハウスに滞在。そこで働いていたが、期間を延長してそのまま滞在することになる。『特に帰る理由もなく』、親も好きなだけ居ていいと言ってくれた。毎日が新鮮で楽しく、失恋の痛みはすぐに解消された。もともとは、フットワークが軽い方ではなかった。

『（以前は）人とのつきあいも、全然なかったんですね。彼女、一人だけになってしまって…（中略）…友だちとか、全然重視していなくて。その反動で、すごいもう（人とかかわりが楽しかった）。』

収入が得られないためゲストハウスを辞め、アルバイトをしながら沖縄で職を探すことにした。運良くある職場に採用された。その後、仕事でナイチャー（沖縄県外、内地の人）を嫌う客に出会い、苦労を経験する。来沖3年目以降、日々の変化は感じなくなり、迷いが生じる。

『働いて、一応、これで落ち着くかなと思ったんですけど。やっぱり、今まで（ゲストハウス）毎日が違う人だったのと違って、毎日が同じ日になったんですね、就職して。当然なんですけど。就職したら沖縄っていう、そのメリットが、東京でも北海道でも同じ、就職したら変わらないっていう部分も感じ始めていて。』

一方で、沖縄の知り合いとの深いつきあいも増え、馴染んできたと感じる。その後、仕事がきつくて退職し、『沖縄にいる理由もだいたい薄くなってきたから』そろそろ内地に帰ろうと考えたが、ちょうど別の職場に採用された。その間、内地出身の沖縄好きの女性と出会い、結婚した。幸せなほうではあるが、仕事の内容には興味を持てず、未来に対してほんやりと不安はある。現在は仕事を辞め、資格取得のため勉強中である。



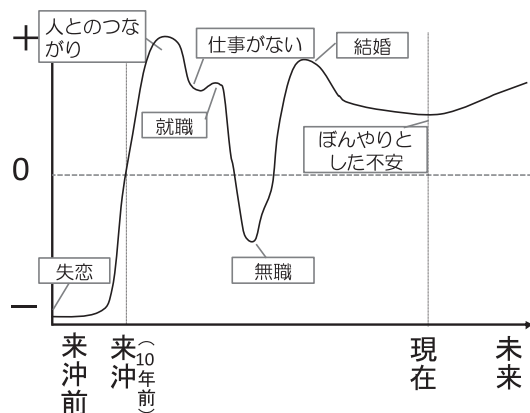


Figure 4 J氏の感情曲線

### ■現在の人間関係と定住意図

もっとウチナンチュ（沖縄人）に近づきたいと思う。来沖から3年目くらいから、徐々に沖縄内の知り合いが増え始め、沖縄の方言もうつつてきたと感じる。人間関係は沖縄にいる友人・知人が中心で、沖縄が自分の拠点であると感じる。老後までずっと沖縄にいたいと思う。

### 【事例2の考察】

J氏が沖縄に来たのは、失恋というネガティブイベントからの『気分転換』の旅行が発端であった。旅行のつもりが移住に至ったという点が特徴的である。また、インタビューの中で、J氏は『人とのふれあい』『人とのつながり』『人とのつきあい』など、沖縄での人間関係に多く言及している。恋人との閉じられた人間関係が、失恋後、沖縄に来ることをきっかけに広がったと振り返っており、そのことが一時的な旅行者に移住を決意させる要因となった。すなわち、J氏の事例は、[変化を求めるきっかけとなるネガティブイベント]+[移住先での人とのつながりの獲得]が主な要因となり、移住に至ったケースであると考えられる。

◎事例3-Y氏（30代男性／会社員／在沖年数6年、单身）

### ■沖縄に来る前の出来事

もともと、沖縄にこれといったイメージを持っていたわけではなかった。ただ昔、つきあっていた人が強烈に沖縄に憧れていた。二人の関係はう

まくいっていたが、彼女が沖縄に行きたいという理由から別れることになった。

『そんなに人を虜にする沖縄ってなんなのかなってというのが、沖縄の一番、最初の第一印象。』

その後20代半ばで、いわゆる「リゾート・バイト」で半年間沖縄に滞在した。そのときに移住も考えたが、病気の親の看病のため、帰らざるを得ない状況だった。

### ■沖縄に来たきっかけ

東京での仕事が忙しかった。忙しいことが嫌というよりはむしろ、毎日同じことの繰り返しが嫌だった。日常に飽きていた。そんなとき、妹が結婚して実家に住むことになり、沖縄に行くことを後押ししてくれた。

『（妹が）「お兄ちゃん、お母さんの病気で（東京に）帰って来よな」みたいな。で、「いいよ」って。「私が今度、家に戻るから行って来ていいよ」って言って、もう、移住ですね。』

行ける準備は整ったと思った。

### ■来沖～現在まで

来てから数ヶ月は、それまでに貯めていたお金で遊びまくった。ゲストハウスに住みながら遊べるだけ遊んで、楽しかった。沖縄は、来る前のイメージそのままだった。人や自然との出会い、新しい自分との出会いもあった。そのときに知り合った人から、仕事も紹介してもらえた。

『海外旅行とはちょっと沖縄は違うので、同じ日本なんて海外っていう意識はないんですけど、東京からは全然、土地柄もすべてが違うところに来たっていう…（中略）…開放感と、自分が一人で生きてんだっていう…（中略）…自立してる実感はすごく感じました。（精神的・経済的）両方ですね。』

だが、病気の母を見舞うため、たびたび東京－沖縄を往復することは経済的に苦しかった。帰ったほうがいいのか、ずっと迷いはあった。その後、母は亡くなり、すごく落ち込んだ。その前の出費による借金もあり、思い通りになら

ないことばかりで、半年くらいすべてが手に着かなくなった。その後、基金訓練に通って新しい仕事を見つけ、少しずつ立ち直った。

沖縄に来てから、自分がなぜ移住に至ったのか、ずっと答えを探している。会う人会う人に「なんで沖縄？」と聞かれ、空が広い、海がきれいななどと自分の感動を伝えていたが、しっくりはこなかった。また、沖縄に来る移住者は、3年で帰ってしまう傾向があるということも知っていた。

『…3年以内に戻ってというデータ、僕も当時から知ってたので、いろいろ。間もなく3年になる頃に、3年になるけど、まだ帰る気配、俺はないなと思ってた。そのあとから、4年目、5年目迎えたときに、やっぱり周りで、こっちで出会った県外の人みんな続々と（内地に）帰ってって、友だちが一人減り、仲いい後輩が一人減り、先輩がいなくなりってなっていく中で、なんで俺、ここ普通に居られんのかなっていうのは、ずっと疑問でした。』

そんなとき、今から3～4年前、あるユタ<sup>8)</sup>に出会った。前からそういう人（ユタ）の話は聞いていたが、特に行く機会はなかったし、わざわざ足を運ぼうとは思っていなかった。そのときはたまたま近くを通り、なんとなく行ってみようと思ったのだった。ユタの話によると、自分の前世は沖縄と関係しているということだった。

『（前世は沖縄で）子どもたちにいろんなものを教えて伝えて貢献したと。だから、沖縄の土地の神様があなたの魂を呼び寄せた、それにあなたは素直に従って来ている、それが理由だと思っって言われました。…（中略）…まずはもう、一番の直感ですっきりでしたね。「ああ、それか」って、「だからだ」ってなりましたね…（中略）…納得がいきましたね…（中略）…多分、もう自分の意識しない、無意識のこのなにかが従って、そっち（沖縄）に引っ張られたんだってというふうに感じたんで。「あ、それだ」と思って。そこからちょっと疑問、

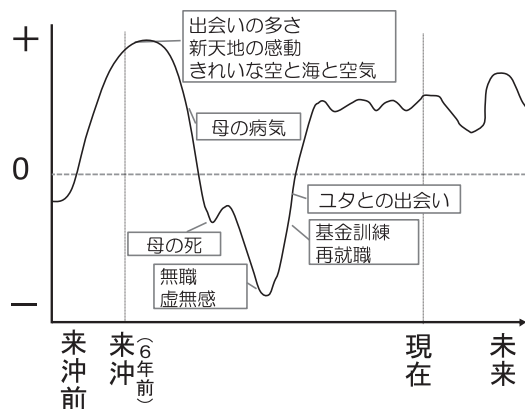


Figure 5 Y氏の感情曲線

なんだろうな、疑問でいうか、（沖縄にいるのが）何でだろう、よりは安心に変わりましたね。』

## ■現在の人間関係と定住意図

沖縄へ来てから前半（約3年間）は、仲の良い友だちはみな県外出身者だった。だが、みんな次々に内地へ帰ってしまい、最終的には一人しか残っていない。そのくらいの時期から、意識的に沖縄県内の人とつきあうようになり、今では沖縄県内の人と中心につきあっている。

『自分は今後を考えると沖縄にいたいと。でも、友だちはみんな帰っていくと。帰っていくと寂しいから自分もそっちに引き寄せていかれるけど、居たいから。居たいほうを優先で取るにはどうすればいいかなって思ったら、もっと（沖縄）県内の人とからんでいけばいいんだってというふうにな。』

以前は、ナイチャー（本土、内地の人）、沖縄の人という区別をしていたが、今はまったく意識しなくなった。だからと言って、ウチナーンチュ（沖縄人）になりたいとは思わない。自分は『地球人』であるから。

これからもずっと沖縄に居たいと思う。

## 【事例3の考察】

Y氏の特徴は、初めて沖縄を訪れたときから移住を意識している点である。その後、移住に至

8) 奄美から沖縄諸島にかけては「ユタ」とよばれるシャーマン（民間霊媒師）がどの地域にもおり、人々の生活に広く深い影響を及ぼしている（大橋、2000）。

る大きなきっかけがあったわけではなく、家庭環境などを考慮して『準備が整った』ときに移動している。また、移住者が結局は内地に帰ってしまう傾向があることも知識として、さらに周囲の移住者の状況をみた経験値としてよくわかっていた。先の事例が移住前に最もネガティブな感情状態を経験しているのに対し、Y氏は沖縄在住中に『母の死』やそれに伴う出来事により、最もネガティブな感情を経験している。それでも帰ろうとしない自分に対して、なぜ「沖縄」なのかを問い続ける。そんなときにユタと出会い、自分と「沖縄」という場所とのつながりを感じ、自分が沖縄に居ることについてある種の「確信」を得る。以上のことから、Y氏は「変化を求めるきっかけとなるネガティブな日常」の中で移住を試み、その後「移住先（沖縄）」という場所とのつながり」への確信を得て定住に至ったケースであると解釈できる。

## まとめ

本研究では、沖縄への移住者に対するインタビューから移住動機の類型化を行い、〈ビジネス・勉強型〉〈同伴型〉〈ライフスタイル変化型〉の3パターンを見いだした。また、〈ライフスタイル変化型〉については個別事例を検討し、[変化を求めるきっかけ（イベント・あるいは日常）]、[変化に柔軟な個人の資質]、[移住先での対人関係]、[移住先とのつながり（愛着）]が移住に至るプロセスにおける影響因として浮かび上がってきた。最後に、これらの影響因について、今後の課題とともにまとめておきたい。

## 変化を求めるきっかけ

沖縄に「ライフスタイル移住」をした3名の事例に共通するのは、現状からの変化に対する強い希求であった。急激なショックを与えるネガティブイベントが発端となる場合（J氏）もあれば、慢性的なストレス、日常からの脱却願望に、周囲の環境が整うこと（U氏の場合は沖縄での就職、Y氏の場合は家族の勧め）で移住という行動に至る場合もある。

また、沖縄県は移住先として人気があるだけで

はなく、日本で有数の観光地である。本研究の調査協力者にも、移住以前に沖縄に来た回数（訪沖縄回数）が10～20回といった元リピーター（観光客）も複数いた。観光動機にも、日常から離れることやストレス解消、決まり切った生活からの脱却などの「緊張解消」の要素があることが示されており（林・藤原，2012）、本研究の事例にみられた移住の契機と類するものである。異なるのは、移住が、一般的な旅行よりも長期的である点、「帰る」（＝元に戻る）ことを前提とせずに日常からの脱却を試みている点である。そういう意味では、かなり極端な行動と言える。沖縄へのリピーターを「周遊型」「ファン型」「行為リピート型」に分類し、それぞれが移住に至るプロセスをモデル化したもの（小原，2012）は存在するが、この分野の研究は少なく、未開拓である。ライフスタイル移住が観光行動の先にあるのか、あるいは両者の関係性、移住者と旅行者の個人特性の共通性などについては、引き続き検討される必要がある。

## 個人の資質

U氏は自らを『浮き草』のようだと形容した。同じ日本国内とはいえ、沖縄へ移住することは地理的に遠く、過去の居住地、出身地やそこで築かれた人間関係から少なからず離れることを意味する。両親など、周囲の人間が反対しないといった外的条件も必要であろう。だが、それまでの生活や日常を捨て、その多くが単身で新天地に移住するという行動を起こさせるには、個人内にあるドライブ（心理的特性）の影響が大きいのは明らかである。前村（2012）は、移動をもたらす心理的特性として「異文化志向」を、定住をもたらす特性として「定住志向」を挙げた。この観点では、移住者たちは「異文化志向」が高く、「定住志向」が低いと予想される。また、沖縄の経済状況や就職難の影響も大きいのが、いずれの人物も沖縄県内でも転職を繰り返していることから、ネガティブな状況に陥ったときに、自らの環境を変化させることに対する柔軟性が共通してみられるようである。ある場所で個人の心が危機に陥ったとき、その場所に留まって解決策を探るのか、離れるのか。移住者のデータを蓄積し、そのパーソナリテ

ィや価値観など、特徴となる心理的特性についてはさらに検討する余地がある。

### 移住先での対人関係

本研究で対象とした調査協力者は、全員が現在沖縄県に居住中であったため、どちらかと言えば長期的に沖縄に住み、沖縄に適応しているケースが多い。Y氏も述べているような、移住から3年以内に『ぞくぞくと』本土へ帰った沖縄移住者、すなわちライフスタイル移住に失敗したケースが扱えていない。こういった限界はあるものの、事例を通して言えるのは、始めは移住者どうしが中心の対人関係が、時間を経るにつれて沖縄県内の人との対人関係へと変化する、あるいは拡がっていることである。加藤・前村（2014）はソーシャル・キャピタルが移住者の適応を促進すること、本土出身者どうしのネットワークと、沖縄県内の人とのネットワークとでは、適応における機能に違いがあることなどを示した。松田（2014）は、Iターン者が（よそ者）であることを自覚しながらも、地域コミュニティに溶け込む努力をしている点を指摘している。以上のことから、対人関係の築き方が、移住者の適応、さらに長期的な滞在や定住を促進する主要な要素であると言える。

### 移住先への愛着

当然だが、移住者は移住先を「選んで」いる。すなわち、本研究の事例では、沖縄という場所への愛着が移住動機の根幹にあると言ってよい。〈ライフスタイル変化型〉の移住者は共通して、移住前の沖縄に「青い海」「白い砂浜」「太陽」といった自然、「のんびり」「楽園」「人が優しい」といった沖縄人の気質など、非常にポジティブなイメージを抱いている。別の表現をすると、沖縄という場所の魅力が pull 要因となり、移住者を呼び寄せていると言える。場所や環境への情緒的な結びつきについて心理学では、「場所愛（Tuan, 1974）」や「場所との絆（Sime, 1995）」という概念が提唱され、Hammit, Backlund, & Bixler（2006）は「場所との絆」が「場所への親和性」「場所への所属感」「場所アイデンティティ」「場所への依存」「場所への根付き」で構成されると

している。移住者の移住動機を踏まえ、沖縄という「場所との絆」の構成要素の変容過程を検討することも、今後の課題である。さらに、上で述べた移住者のどのような個人特性が、移住先のどのような要素に惹かれるのか、といった疑問も残る。つまり、同じ移住者でも、先行研究（松田, 2014）が扱う山林地域への「山型」移住と、沖縄のような「海型」（あるいは、「南の島型」）移住はどのように異なるのか。この疑問への回答を探索すれば、パーソナリティ研究としてだけでなく、移住者獲得を目指す地域コミュニティに実践的な寄与ができる可能性もある。

このように、移住者の個人内で生じる心理的プロセス、パーソナリティや、移住先との心理的つながり（愛着）の検討については、社会心理学が貢献できる余地が多分に残されている。今後は、事例研究を蓄積するとともに数量的な検討も必要であろう。

### 引用文献

- ブランド総合研究所（2014）. ([http://tiiki.jp/news/wp-content/uploads/2014/10/survey\\_2014\\_newsrelease.pdf](http://tiiki.jp/news/wp-content/uploads/2014/10/survey_2014_newsrelease.pdf). 2014年10月30日アクセス)
- Furnham, A. & Bochner, S. (1986). *Culture Shock: Psychological reaction to unfamiliar environments*. London; New York: Methuen.
- Hammit, W., Backlund, E. A., & Bixler, R. D. (2006). Place bonding for recreation places: Conceptual and empirical development. *Leisure Studies*, 25(1): 17–41.
- 林幸史・藤原武弘（2012）. 観光地での経験評価が旅行満足に与える影響：観光動機と旅行経験の観点から. 関西学院大学社会学部紀要, 114, 199–212.
- 井本伸（2009）. 沖縄移住を考える：どのような人が移住してきているのか？ 沖縄国際大学経済論集, 6(1), 1–8.
- 伊藤哲司・田中共子・能智正博（2005）. 動きながら識る、関わりながら考える：心理学における質的研究の実践. ナカニシヤ出版.
- Johnston, C., & Kawai, J. (2011). Why Did I Come Here?: Migration Motives of Raifusutairu Ijusha Living in Auckland, New Zealand. 日本ニュージーランド学会誌, 18, 5–19.
- 加藤潤三・前村奈央佳（2014）. 沖縄の県外移住者の適

- 応におけるソーシャルキャピタルの影響. 人間科学 (琉球大学法文学部人間科学科紀要), 31, 111–143.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法. 中央公論新社.
- King, R., Collyer, M., Fielding, A., & Skeldon, R. (2010). *The atlas of human migration: Global patterns of people on the move*. Brighton: Myriad Editions.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2012). ([http://www.ipss.go.jp/pp-shicyoson/j/shicyoson13/1kouhyo/gaiyo\\_1.pdf](http://www.ipss.go.jp/pp-shicyoson/j/shicyoson13/1kouhyo/gaiyo_1.pdf) 2014年10月30日アクセス)
- 前村奈央佳 (2011). 移動と定住に関する心理的特性の検討: 異文化志向と定住志向の測定および関連性について. 関西学院大学先端社会研究所紀要, 6, 109–124.
- 松田智子 (2014). Iターンという生き方: 美山への移住者を事例として. 佛教大学社会学部論集, 58, 149–162.
- 長野県 企画振興部地域振興課 (2014). Iターン信州. (<https://www.i-turn.pref.nagano.lg.jp/> 2014年10月30日アクセス)
- 長友淳 (2007). 90年代日本社会における社会変動とオーストラリアへの日本人移民: ライフスタイル価値観の変化と移住のつながり. オーストラリア研究紀要 (追手門学院大学), 33, 177–200.
- 中澤高志・由井義通・神谷浩夫 (2012). 日本人女性の現地採用労働市場の拡大とその背景: 2000年代半ばのシンガポールの事例. 地理科学, 67(4), 153–172.
- Oberg, K. (1960). Culture shock: Adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*, 7, 177–182.
- 小原満春 (2012). リピーターが移住に至る行動プロセスに関しての一考察: 沖縄県での観光行動と移住を事例として. 地域産業論叢 (沖縄国際大学大学院地域産業研究科), 10, 1–18.
- 大橋英寿 (2000). 津軽と沖縄のシャーマニズムにみる癒し. 心身医学, 40(6), 423–428.
- 太田雅子 (2000). なんで沖縄に移住したの? 潮, 499, 152–159.
- 柴田俊一 (1993). 私の感情曲線. 川瀬正裕・松本真理子 (編) 自分さがしの心理学: 自己理解ワークブック pp.104–406. ナカニシヤ出版.
- Sime, J. D. (1995). Creating places or designing spaces? In L. Groat ed., *Readings in Environmental Psychology: Giving Places Meanings*. New York: Harcourt Brace.
- 総務省統計局 (2014). (<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001116910> 2014年10月アクセス)
- 須藤直子 (2010). 新しい「移住」のかたち: 1990年代以降の沖縄への移住を事例として. 早稲田大学大学院文学研究科紀要 第一分冊, 56, 63–80.
- 須藤直子 (2012). 変わりゆく移住の形式: よそ者 (stranger) 概念からみる「新しい移住」. ソシオロジカル・ペーパーズ (早稲田大学大学院社会学院生研究会), 21, 36–53.
- Thang, L. L., Maclachlan, E., & Goda, M. (2006). Living in “My Space”: Japanese Working Women in Singapore (Symposium: The Diversification of Women’s Work and Life in Japan: An Approach from Geography), 地理科学, 61(3), 156–171.
- Tuan, Y.-F. (1974). *Topophilia: A study of environmental perception, attitude, and values*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Ward, C., Bochner, S., & Furnham, A. (2001). *The psychology of culture shock*. Hove, East Sussex: Routledge.
- Winter-Ebmer, R. (1994). Motivation for migration and economic success. *Journal of Economic Psychology*, 12, 269–284.
- 山崎真之 (2013). 新島民による新たな生業に関する研究: 小笠原村父島の移住者の事例を中心に. 生活学論叢, 24, 15–26.
- 吉原直樹 (2008). モビリティと場所: 21世紀都市空間の転回. 東京大学出版会.

## Social Psychological Considerations of ‘Life-Style Migration’

### ABSTRACT

Why do people move to places where there are no economic advantages? Shortly after the 1990s, young Japanese have been driven by the pursuit of a ‘different type of life style’ and immigrated to places or countries where they do not have familial ties. This phenomenon is called ‘I-Turn’ or ‘life-style migration.’ Okinawa is one of the most popular locations for life-style migrants, as it is surrounded by scenic tropical oceans and has a warm climate, in addition to a unique culture and history. The purpose of this study is to develop a certain pattern of domestic migration, and to psychologically investigate the motivations of moving based on participants’ life events and emotional changes. Three researchers conducted semi-structured interviews with 26 participants (20 men, and six women with a mean age of 33.46). All participants emigrated from the Japanese mainland to Okinawa. Results showed that participants’ motivations for moving were categorized into three main groups, namely, migration for business or study, migration to accompany someone else, and life-style migration. Then we focused on three typical cases of life-style migration. According to the interviews, some crucial factors of the migration processes were found; (negative) triggers for seeking changes of life, personal traits of flexibility, interpersonal relationships in the destination, and attachment to the destination.

**Key Words:** lifestyle migration, I-Turn, migration motivation